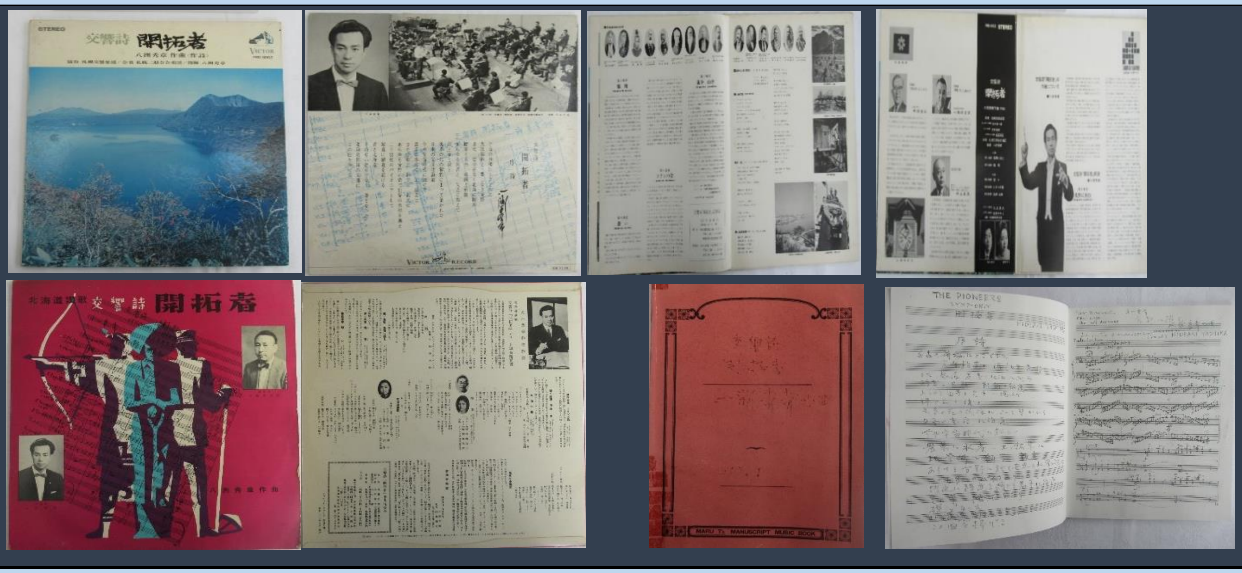
資料名	八洲秀章作曲レコード（LP）	区分	交響詩　開拓者

写真・スケッチ



説　明　（商品名，製造所，使用方法，歴史，時代背景　など）

交響詩「開拓者」は、自然の猛威に傷つきながらもたくましく生きた不撓不屈（ふとうふくつ）の開拓精神を、十数年の歳月をかけて、全五楽章に描いた交響詩で、昭和43年、開道百年の記念としてレコードになりました。
この曲は、第一楽章「荒野に挑む」、第二楽章「犠牲」、第三楽章「憩い」、第四楽章「コタンの歌」、第五楽章「海幸山幸」からなっています。

■序　詩

千古の神秘にとざされた　大原始林と涯（はて）しなき荒野に　また怒涛逆巻く北海に挑み　酷寒と炎熱　飢餓と病魔
あらゆる困苦と欠乏に堪えて　汗と血と　幾多死の犠牲によって築かれた　日本の宝庫　北海道
今や宇宙時代に赴けて農業に水産に　工、鉱業に　また学術に　科学に　観光に
あらゆる分野に於て世界の水準を越え　二十世紀のパイオニアとして　躍進に躍進を続ける　若き北海道
その尊い捨石となり礎となった　北海道開拓の父祖に　この曲を捧げる

■第一楽章　荒野に挑む

未開の新天地を描くのにふさわしい、かつて世界のどこにもないリズムとメロディー、特異なるオーケストラの編成によって人間のみの持つ逞（たくま）しい生命力と鉄の意志、撓（たゆ）みなき努力による大自然の猛威との戦いが展開される。

■第二楽章　犠牲（いけにえ）

大いなるいとなみのもとに、大いなるいけにえはあり。医薬とてなき最果ての地に、開拓の人柱となって斃（たお）れし

■第三楽章　憩い

激しい労働と長い忍苦を経て味わう安息のよろこびは大きい。お盆に、お祭りに、そして休日に人々はあたかも食に飢えたるごとく、それぞれの音楽と踊りに時を忘れ、疲れをいやす。苦しみの中に見出されるそうした小さな歓び、然し、そのよろこびは尊い。人はどんな生活の中にも「いこい」と希望を見出すものである。

■第四楽章

いにしえより日本民族と深い交流を持ち、現在もわれわれと慣れ親しまれているアイヌ民族の伝説・子守唄・コタンの歌・熊祭り等を描く。

■第五楽章

永い歳月にわたる撓（たゆ）みなき努力と幾多の尊い犠牲、力の結集によって今や名実ともに日本の宝庫となった北海道、その豊かなる資源と大いなる希望、幸福が混声によって大合唱され演奏されて、曲はクライマックスに達する。

八洲先生は北海道に生れ、21歳まで郷土に育った開拓者の子孫で、自らも鍬を握り、鋸を持っての百姓仕事や荒地の開拓、一日二十時間に及ぶ激しい労働をしたといいます。
あの大原始林と果てしない荒野、酷寒と炎熱の自然の猛威に打ち勝った父や兄の開拓魂を受け継ぎ、北海道の大自然と人情を、そして民族音楽を基調にした音楽の創作にただ一生懸命、寝食も忘れがちに取り組んだといいます。この「開拓者」の曲が、たとえつたないとしても、万一皆様のご期待に十分添うことができなかったとしても、八洲先生には恐れも悔いもないと言っています。何故ならば、この曲が現在の自分にとって全力を尽くしたものであり、誠心をこめた真実の作品であるからです、と関係者に対する感謝の言葉とともにパンフレットに書き記しています。
※交響詩とは、十九世紀中頃に、作曲家のリストによって創られたもので、絵画的内容を管弦楽で描写するものだそうです。

参考文献　：　下山光雄著：さくら貝の歌　八洲秀章の生涯